



隣の美母娘

～女子高生彼女と禁断のカノ母～

芳川葵

挿絵／阿川椋

立ち読み版



| | | |
|-------|----------------|-----|
| プロローグ | | 4 |
| 第一章 | 初めてのデート 初めてのキス | 11 |
| 第二章 | カノ母との蜜約 背徳の初体験 | 52 |
| 第三章 | 僕の葛藤と捧げられた純潔 | 110 |
| 第四章 | ラブホからはじまる新たな関係 | 188 |
| 第五章 | 美母娘 浴室の狂艶 | 233 |
| エピローグ | | 281 |

登場人物

Characters

笠原 直樹

(かさはら なおき)

高校一年生。真面目で受け身的な性格の少年。幼い頃から美穂子に好意を持っている。

山室 美穂子

(やまむろ みほこ)

直樹の家の隣に住む幼なじみ。清楚な顔立ちと抜群のスタイルを持つ高校三年生。明るく、心優しい少女だが、気心の知れた直樹に対しては悪戯っぽくからかうことも。

山室 祥子

(やまむろ しょうこ)

美穂子の母。直樹とは家族ぐるみの付き合い。母性的な優しさで、娘と直樹を温かく見守る。



「じゃ、じゃあ、脱いであげるけど、触ったりするのは、絶対になしだからね」
「うん、わっ、分かった。僕、ミホちゃんに、触らない」

恥ずかしさを隠すように、強気な口調で言った美穂子だが、その言葉はかすかに震えてしまっている。だが、直樹の緊張も相当なのだろう。かすれた声で、途切れ途切れに言うと、右手と右足が一緒に出るようなぎこちなさで腰窓から離れ、反対の壁際におかれたベッドの縁へと腰をおろした。

（ふう、恥ずかしがることないのよ。ナオとは昔、一緒にお風呂に入ったことだってあるんだから。それに見せるのは下着姿までで、肝心なところは見せないんだもの、だから、そんなに緊張すること、ないのよ）

心臓の鼓動が大きくなっていた。緊張で呼吸が乱れがちになるのを、必死になだめていく。

一度目を閉じ、大きく深呼吸してから、女子高生の両手が首の後ろにまわされた。胸元を飾るリボンの内側に覗く、くるみボタンは飾りであり、背中側のファスナーによつて脱着をするタイプのワンピースなのだ。

ジ、ジ——……。沈黙のおりた部屋に、ファスナーが引きおろされる音が響く。
「ああ、ミホちゃん……」

「は、恥ずかしいから、あんまりジロジロは見ないで」

恍惚感に満ちた直樹の声に、美穂子の羞恥がいつそう募る。

恥ずかしそうに頬を染めながらも、女子高生はファスナーをおろし終えると、両手をクロスさせるようにして両肩を抱き、小刻みに震える両手で、ゆっくりとワンピースを脱ぎおろした。

華奢な肩があらわれ、ピンクのブラジャーのストラップが露わになる。チラッと愛する少年を見ると、蕩けんばかりの眼差しで一心にこちらを見つめていた。その態度にゾクリと背筋を震わせつつ、美穂子はワンピースをおろしていく。

ブラジャーは少し大人っぽさのある、ローズプリントとレースのレイヤードが施された、四分の三カップ、ピンクの一品であった。細身の身体でありながら、Fカップに実った豊かな若乳が、高一男子の視線に供せられていく。

「ゴクツ、すつごい、ミホちゃんのオッパイ、とつても、大きい……」

「ああん、ダメだよ、ナオ。私、ほんとうに恥ずかしいんだから」

直樹の呟きに、全身が燃えるように熱くなる。それでも美穂子は、小さく呼吸を整えると、羞恥を振り払うように、ワンピースを掴んでいた両手の指を離した。

ツンツと突き出たヒップで、一度引つかかりを覚えはしたものの、布地はストーンツ

と足首まで落ちてくる。ショーツはブラジャーとペアになったもので、前面部分にローズプリントが施されていた。

「すっ、凄い！ 凄すぎるよ、ミホちゃん。とつても綺麗だ」

（見られている。ナオに下着姿、見られちゃってるよう。やっぱり、恥ずかしい）

「あ、ありが、とう。でも、本当に恥ずかしいんだからね」

直樹の視線が、たわわに実った双乳、ブラジャーからこぼれる若乳に注がれているのが、痛いほどに分かる。恋人の視線に、乳房が張りを覚え、カップの内側で守られている乳首が、ピクッと小さく震えてしまう。

その後、直樹の視線が、キュッと深く括れたウエストから、誰にも晒したことのない秘所を守るショーツへと移動してきた。

見つめられた場所が熱く火照ってくる。羞恥とともに不思議な感覚が全身を巡り、小さく腰が震えてしまった。子宮に感じる疼きが増し、柔褌がヒクついてしまう。ヂュツと甘蜜がクロツチにシミを作り出したのを感じ、身体の火照りが増していく。

（ああん、どうしよう、私のあそこ、ナオに見つめられて、濡れてきちゃってる。こんな恥ずかしいこと、知られたくないよう）

羞恥で腰がくねってしまいそうだ。だが、そんな姿態を晒せば、見咎められてしま

う危険もある。それはさらに恥ずかしいことであり、美穂子は美しく整った顔を火照らせ、直樹の熱い視線に下着姿を晒しつづけていた。

「ああ、ミホちゃん……はあ、はあ、ああ……」

息を荒げた直樹が、ベッドから立ちあがった。その右手が、チノパンを盛りあげるペニスに触っている。

「はあん、ナオ、ダメだよ。私を見ながら、ど、どこ、触ってるのよ」

「えっ？ あっ、ご、ごめん」

かすれた美穂子の声に、直樹がハツとした表情を浮かべ、慌てて右手を股間から離れた。その顔は恍惚感に染まりながらも、理性が戻ったのか、恥じらいの色も滲ませている。

（私だけが、こんな恥ずかしい思いするのは、不公平よね。恋人なら、ナオも一緒に）
「ねえ、ナオもお洋服、脱いで。私だけなんて、やっぱ不公平だよ。だからナオも、私に脱いで見せて」

「ミ、ミホちゃん！」

「いいでしょう。ねッ」

潤みはじめた瞳で、年下の恋人に甘いおねだりをしていた。

「わ、分かった。僕も脱ぐよ。ミホちゃんだけに、恥ずかしい思いなんてさせない」
勢いこむように頷いた直樹は、チノパンからオックスフォードシャツの裾を引っ張り出すと、半袖シャツのボタンを外し、あつという間に上半身裸になった。まだ男になりきっていない、頼りなく薄い胸板が少年らしい。

次いでズボンのベルトに手をかけた直樹は、一瞬、躊躇を見せたものの、それでもベルトを緩め、ズボンのボタンとファスナーを開放してみせた。ストンツとチノパンが床に落ちていく。

「すっ、すっごい……。男の人って、そこ、そんなに大きくなるんだ」

ブリーフ一枚の下腹部に、美穂子の視線は釘づけであった。白い下着は、中に隠されたペニスの輪郭を浮きあがらせるように、こんもりと盛りあがっている。さらに、腰ゴムの辺りに、薄っすらと濡れジミがあるのを、乙女は見逃さなかった。

（男の人も興奮すると、オチンチンの先っぽから我慢汁っていうのが漏れ出すって、なにかで読んだ気がするけど、あれって、そのシミなのかしら。だとしたら、ナオ、本当に私の下着姿で、興奮してくれているんだ）

初めて目の当たりにする男性器の盛りあがりに、美穂子の快感中枢が痺れてきた。無意識のうちに、何度も生唾を飲みこみ、凝視してしまう。

「ああ、ミホちゃん。見て！ 僕、ミホちゃんのこと考えると、いつも、こんなふうになっちゃうんだ」

直樹は羞恥よりも興奮が優っているのか、かすれた声をあげつつ、両手をブリーフの縁に引っかけ、一気にそれを脱ぎおろしてきた。

ぶんっ、唸るように完全勃起のペニスが飛び出し、ペチンッと下腹部を叩いた。

「キヤッ！」

裏筋を見せそそり立つ強張りに、美穂子は小さく悲鳴をあげると、反射的に両手で顔を覆った。心臓がドキン、ドキンッと信じられない速さで鼓動を刻んでいる。

（なんでパンツまで脱ぐのよ！ 大きくなったオチンチン、見ちゃったじゃない）

一瞬ではあったが、脛の裏に焼きついた強張りの残像。亀頭はすっかり皮が剥けてパンパンに張り詰め、急角度で屹立しているため、裏筋から陰囊にかけてのラインがはつきりと目に映りこんでいた。

（それにしても、男の人のつて、あんなになるんだ。あの大きくなったものが、いつかは私のあそこに……）

意識は自然と男女の交わりに向かってしまう。逞しい肉鏝が肉洞に押し入ってくることを想像すると、ブルッと腰骨が震え、ペニスの感触を知らぬ柔褌がヒクヒク蠢く。

(ダメ、あんなの挿れられたら、絶対に裂けちゃうよ)

セックスを意識した途端、未知なる恐怖が乙女の総身を駆け巡った。だが同時に、年頃の娘としての興味も沸き立ち、顔を覆った指を少し開いて、その合間から直樹の淫茎を窺い見てしまう。

「ごめん、突然、こんなモノ見せちゃって。でも、僕、ミホちゃんに僕の全部を知って欲しいんだ。どれだけミホちゃんが好きかってことを。汚らわしいって嫌悪されちゃうかもしれないけど、僕、毎日こうやって、くっ、ああ……」

美穂子にペニスを見られ、興奮がさらに高まったのか、かすれた声で訴えかけてきた直樹が、いきなり右手で強張りを握りこんだ。さらにはそのまま右手を上下に動かし、いきり立つ硬直を扱きあげてくる。

チュツ、クチュツ、瞬く間に湿った粘音が起こり、美穂子の鼓膜を震わせた。

(やだ、これって、オ、オナニー、でしょう。ナオが私を見ながら、自分でオチンチン、こすってるだなんて……)

幼なじみで恋人でもある直樹の突然の自慰に、美穂子は両目を見開いてしまった。

顔を覆うようにしていた両手が、いつしか脱力したように両脇に垂れさがり、目の前で展開される性行動を凝視してしまう。

「はあ、ああん、ナオ、あなた、一体、なに、はじめちゃってるのよう」

「ほんとごめんね、ミホちゃん。ンくう、はあ、大好きなミホちゃんが、下着姿を僕に見せてくれていただけでも、ンはう、興奮、しちゃうのに、ああ、ダメだ、ミホちゃんに見られていると思うと、僕、もう、すぐにでも……」

驚きの声をあげた美穂子に、直樹は上ずった声で返事をしつつ、右手の速度があがっていく。

「ナ、ナオ……」

クチュツ、くぢゅつ、手淫速度の高まりと同時に、粘ついた淫音間隔も短くなり、ツンツと若牝の精臭までもが鼻腔をくすぐってきた。

性体験はないが、身体はすっかり女としての性感を感じられるまでに成長している女子高生。鼻腔の奥を刺激してくる淫臭に、腰がウズウズと疼きはじめてしまった。

（ああん、やだ、ナオのエッチに当てられて、私まで変な気分……。うん、なに、あそこが、いままで感じたことがないくらい、ムズムズしてるよう）

子宮の鈍痛はその感覚を増し、男を知らない肉洞内では、若褻が信じられないほどに蠢いている。少し背伸びをした感のあるローズプリントショーツ、その股布部分には恥ずかしい甘蜜が次から次へと溢れ返ってしまう。

「ほんとにごめんね、ミホちゃん。こんな、変態行為を見せちゃって。でも、僕、もう、はあ、出ちやい、そうだ」

狂おしげに眉間に皺を寄せ、恍惚の表情を浮かべている直樹は、それでもなお美穂子を氣遣う言葉をかけてくれた。その優しさが、乙女の胸を射貫いた。

「ねえ、ナオ、そうやってオチンチン、こすると、そんなに気持ち、いいの？」

「うん、ああ、すつごく、気持ちいいんだ。痺れるような快感が、腰から頭に突き抜けて、くうう、それにいまは、大好きなミホちゃんの下着姿、見せてもらえてるから、なおさら、はあ、興奮しちゃうんだ」

快感に蕩けた眼差しで、直樹が美穂子の全身をウットリと見つめてきた。

刹那、美穂子の総身が大きく震えた。ブラジャーに包まれたFカップの若乳にはいつそうの張りを覚え、淫裂がむず痒く疼く。腰が自然とくねり、適度な肉づきの太腿同士を、軽くこすり合わせた。直後、ンチュツ、かすかな蜜音が乙女の耳に届く。

「ああん、私のあそこ、すつごく濡れちゃってる。このままじゃ、エッチな音がナオにまで聞こえちゃうかもしれない」

「ああ、ナオ、変なこと、言わないで。ナオにエッチなこと言われたら、私……」

「ごめんね、でも、本当にすつごく嬉しいんだ。みんなが憧れてる、ミホちゃんの下

着姿、くッ、ナマで見られるなんて……。はあ、ブラジャーに包まれた大きなオツパイも、細いウエストも、そして……。ゴクッ、あ、あそこを守る、パ、パンティも……」

「ナオだからだよ。彼氏であるナオだから、私、見せてあげてるんだからね」

「うん、ありがとう、ミホちゃん。ンはあ、ほんとに、大好き、だよ」

チュッ、クチュッ、ンヂュッ、激しく右手でペニスを扱きあげ、快感に蕩けそうになりながらの告白が、美穂子の胸をキュンッとさせる。

（ナオ、本当に気持ちいいんだわ。オチンチンをあんなふうに勢いよくこすってるだなんて……。はあ、近い将来、私のあそこに、きつとあれが入ってくるんだわ。すっごく硬そうなオチンチンが……。凄く痛くて、でも、気持ちがいいことに……）

肉洞にペニスが押し入ってくる場面を想像した直後、美穂子の腰骨が大きく跳ねあがった。初心な膣壁がキュンキュンと震え、脳天に擬似的な痛みと快感が突き抜けていく。同時に、大量の甘蜜がクロツチにシミを広げた。

「はあん、ああ、ナオ、私もナオのこと、大好きよ。ねえ、少しだけ、触ってみてもいい？ その、ナオの、オ、オチン、チンに」

「えっ!？」

美穂子が恥ずかしげに大胆なお願いを口にした直後、直樹の両目が見開かれた。

驚きからか、強張りから右手が離れた。刹那、ペチンツと乾いた音を立て、ペニスが少年の下腹部を叩く。

（ああ、私、また変なこと言っちゃった。下着姿を見せるだけでも、すつごく恥ずかしいことなのに、硬くなったオチンチンに触ってもいいか、なんて、これじゃ、ナオにエッチな女の子って思われちゃうよう）

年下の恋人が下着姿の乙女を見つめながら自慰を行う特殊な状況に、美穂子の思考が酔わされていた。それが年頃の乙女の持つ好奇心を刺激し、普段なら恥ずかしさが優って言えないであろう言葉を紡がせる。

「い、イヤなら、いいのよ。私だって、どうしても触りたいワケじゃないし。ナオが喜んでくれるならと思っただけで、別にそんな、無理にとは」

「うん、分かっているよ。ミホちゃんは僕のことを思って、言ってくれているんだよね。嬉しいよ、大好きなミホちゃんに触ってもらえるなんて。その言葉だけで、出ちゃいそうなくらいだよ」

その言葉を証明するように、下腹部に貼りつきそうな強張りが、ピクピクツと小さく胸震いを起こしたのが、はつきりと分かる。漏れ出た粘液が、亀頭裏を通って、肉竿の裏筋をツーツと垂れ落ちていく。

「ああ、ナオ……」

（そうよ、ナオは私のこと、ちゃんと分かってくれているもん。だったら私も、ナオに少しでも喜んでもらえるように……）

上気した顔。潤んだ瞳で最愛の少年を見つめた美穂子は、艶めきを増した眩きを漏らすと、ベッド前に立つ直樹の正面に移動し、すつと膝立ちの姿勢を取った。

眼前に、逞しい男性器が飛びこんでくる。最初に見たときよりもさらに幹周りが太くなり、太い血管が逞しく浮きあがっていた。さらには、亀頭先端から漏れ出した先走りによって、裏筋も粘液で濡れ、テカっている。

（凄い。ナオのオチンチン、さつきより、さらに大きくなってるみたい。それに、この独特の濃い匂いも、こんなに強烈だなんて……。私、本当に酔っちゃいそうだよ）
鼻腔の奥を刺激してくる若牝の精臭に、脳がクラッと揺さぶられそうになる。

腰が妖しくくねりそうになるのを、乙女の恥じらいで辛うじて耐えた美穂子は、おぼろげと右手を肉竿の中央部にのぼした。緊張のため小刻みに震える指先で、やんわりと強張りに触れていく。

「キヤッ、す、すつごい、こ、こんなに熱くて、硬いだなんて……」

「んはっ、ああ、み、ミホ、ちゃんっ」

美穂子の驚愕の声と、直樹の愉悦のうめきが同時に起こった。指先を焼きそうな硬直が、ピクツと跳ねあがり、恐々と握る女子高生の指を、弾き飛ばしてきそうになる（ああ、ほんとにすつごい。こんなに熱くて硬いだなんて、信じられないわ。こんなあそこに挿れられたら、膣中が火傷しちゃうんじゃないかしら）

初めて握る男性器に、美穂子の呼吸が一気に荒くなった。喘ぐように肩を上下させつつも、その右手は直樹のペニスを握りつづけている。

「ああん、男の人のオチンチンって、大きくなると、こんなに熱くなるんだね。はんツ、それに、ナオのこれ、ピクピク痙攣しながら、また、大きくなったみたい」

「くうう、す、凄い。ミホちゃんが、ほんとに僕の硬くなったのを、握ってくれているなんて……。はあ、本当にすぐにでも、出ちゃいそうだ。ねえ、ミホちゃん、お願い、少し、くツ、こすつてくれる？」

「うん、分かった。初めてで上手じゃないと思うけど、我慢してね」

潤んだ瞳で直樹を見上げた美穂子は、愉悦に耐えるように押し出された少年の言葉に、甘い吐息混じりに答えると、恐る恐る右手に握る太幹を上下にこすりあげた。

チュツ、グヂュツ、溢れ返った粘液が指に絡まり、艶めかしい摩擦音が奏でられる。「んほう、あう、ああ、み、ミホちゃん、いい。すつごく、気持ち、いいよ」

「そ、そうなの、このくらいの強さで、大丈夫？」

「うん、大、じょうぶッ。自分で触るのは比べものにならないくらい、気持ちいいよ。はあ、僕、もう、すぐ、くッ、出ちゃうよ」

「はあん、ナオのこれ、凄いいよ。ピクピクッてずつと震えてるし、先っぽからエッチな汁がどんどん溢れ出てきて、私の手にもたくさん、かかっちゃってる」

熱く漲る肉竿を優しくこすりあげた刹那、直樹の全身に大きな震えが駆け抜けた。

腰がビクン、ビクンッと何度も跳ねあがり、指を絡める肉竿が小刻みな痙攣に見舞われていく。さらには、張り詰めた亀頭先端がクパッと開き、ネットリとした先走りを溢れ返らせる。それが乙女の細指に、ネチョッと絡みついていた。

（ああん、男の人のオチンチンって、なんて硬くて熱いのかしら。それに、ツンツと鼻の奥を刺激してくる匂いで、なぜかあそこが凄くムズムズしちゃってるよう）

クチュツ、くぢゅつ、太幹をさするたびに漏れる淫音と、さらに濃密になった若い牡臭に、美穂子のおんなが本能的な刺激を受ける。

無意識のうちに、腰が悩ましくくねりだしていた。さらには、適度な肉づきの若腿同士を軽くこすりつけ合ってしまった。

ンヂュツ、クロツチがよじれ、溢れ出した甘蜜がおんなの淫音を奏でてしまう。

（私のおそれも、信じられないくらいに濡れちゃってる。エッチにあそこを濡らしているなんて、ナオに知られたら、恥ずかしくて死んじやいそう）

その羞恥の思いが、逆に右手に握る強張りへの刺激をいっそう激しいものにした。熱い肉竿をギュッと強く握りこみ、ゴシゴシと扱きあげたのだ。

「ぐはッ！ ンくッ、はぁ、ミホ、ちゃん、ダメ、そんな、強く、こすられ、たっらあ、はぁ、僕、我慢、出来なくなっちゃうううう」

「あぁん、凄いよ、ナオのおチンチン。また大きく震えて、さらに、大きく熱くなってる。気持ちいいのね。私の手で、気持ちよくなってくれているのね」

グヂュッ、ンチュッ、クチュッ……。粘ついた摩擦音がさらに大きくなり、右手に感じるペニスの脈動も激しさを増していた。

（これっでもうすぐ、白いのが出てくるってことかしら？ 私がナオを、本当に気持ちよくしてあげてるんだわ）

経験はなくとも、おんなの本能が、射精が近づいていることを敏感に感じ取った。

それとほぼ同時に、肉洞内の疼きが増し、蠕動する若褌が大量の甘蜜をショーツに滴らせていく。未開の秘裂にかすかな刺激を送りこむため、艶めかしく腰をくねらせながら、太腿をこすりつけ合う。



（おばさんの太腿、凄いムチムチしてて柔らかくて、気持ちいい。それに、初めて嗅ぐエッチな匂いも、刺激的すぎる）

熟腿を撫でつけながら、恍惚感が急上昇してくる。薄褐色の秘唇が、もう目と鼻の先の近さまで接近し、ツンと鼻の奥を刺激してくる牝臭が、強く感じられるようになっていた。淫裂の卑猥さと匂いに、強張りがビクンツと震えてしまう。

「ううん、直くんったら。そんな必死に太腿、撫でつけて」

悩ましく腰をくねらせた祥子が、今度はゆつくりと上体をペニスに向かって倒しこんできた。腹部に視線を向ければ、ユツサユツサと雄大に揺れながら、砲弾状の熟乳が近づき、やがてグニョリと潰れながら接触してきた。

「んはっ、おおお、おばさんの大きなオツパイがお腹に……」

腹部には柔らかな乳肉と、乳首のコリツとした感触がはつきりと伝わってきていた。双乳の肌触りに腰骨を震わせた直後、熟女の右手が肉竿をやんわりと握りこんだ。そのまま、ゆつくりと起こしあげてくる。

「ぐふおッ、あう、あつ、ああ、お、おば、きんツ」

「ああん、直くんのオチンチン、とつても硬くて、凄く熱いわ。はあん、ほんとに嬉しい。待ってね、いまおばさんがお口でしてあげるから。——はうッ」

ペニスを握られた瞬間、眼窩に悦楽の瞬きが襲い、睾丸がキュンツと迫りあがりそうになった。その直後、亀頭に熱い吐息が吹きかかり、張り詰めた先端が生温かな粘膜に包みこまれた。

「あふう、ンカッ、あつ、ああ、おば、さん、くうう、す、すっごいよう……」

それまで経験したことがない、鋭い愉悅の突きあげが全身を襲った。視界が一瞬、白く霞み、むつちりとした熟腿に這わせた両手に、思わず力が入ってしまう。

「ヂュツ、ちゅぱっ、ンチュツ、ふうン、チュツ、クチュツ……」

その間にも祥子はゆつくりと首を上下に振り、朱唇で強張りを妖しく扱きあげてきていた。さらには、ネットリとした舌が亀頭に絡みつき、小刻みな振動を伴って鈴口や亀頭裏の窪みをまさぐってくる。

（はあ、なにこれ、これが本物のフェラチオ……。ミホちゃんにしてもらったのと、全然違うよ。おばさんの舌で先っぽくすぐられると、僕、それだけで……）

「だ、ダメ。おば、さんッ。そんなエッチに扱かれたら僕、すぐに……」

奥歯を噛み締め、迫りあがる射精感を必死に押し留めていく。

「ふうン、チュツ、ぢゅぱっ、クチュツ、チュポ、ぢゅちゅ……」

直樹のうめきにも、祥子はまるで動じる様子もなく、首を上下に振りつづけてきた。

さらには悩ましくポリウム満点のヒップを左右にくねらせてみせる。

「はあ、ああ、ンあう、くうう、おば、さん……」

陰囊内で煮えたぎった欲望のエキスが、グツグツと音を立てながら、輸精管に押しあがってくる気配をはっきりと感じる。奥菌を噛むだけではなく、肛門も引き締め、射精衝動の迫りあがりをなんとか食い止めていく。

（ああ、そうだ。僕も、おばさんのオマ○コ、気持ちよくしてあげないと。はあ、それにしても、オマ○コってこんなエッチな形と匂い、してたんだなあ。清楚な感じのミホちゃんも、ここはこんなふうにあんな感じなんだろうか）

霞みそうな視界の先に、薄褐色の淫裂が口を開けている光景が飛びこんできた。初めて間近に見る女性自身は、活きのいいアワビのようにウネウネと蠢き、淫蜜を滲み出させている。その牝汁が、強烈な精臭となって鼻の奥に突き刺さってくる。

強張りを襲う蕩けそうな快感に呑みこまれないためにも、直樹は祥子の秘唇へと唇を近づけた。鼻腔粘膜をくすぐる牝臭がいつそう濃くなってくる。目がしよぼつきそうになりながら、ぼってり肉厚な女肉への口づけを敢行した。

「チュツ、ちゅちゅつ、ペロ……」

（こ、これが、女の人の、おばさんの、オマ○コ……。こんなに柔らかくて、頭がク

ラクラするほどエッチな匂いに溢れているだなんて……。普段、優しく話しかけてくれているときも、ここはこんなに……)

プニユツと温かく柔らかな感触を、唇粘膜に覚える。湿った淫唇の艶めかしさに妄想が膨らみ、牡の本能がゾクリと反応していく。

「チュツ、ペロ、ソウン、ペロペロ……」

陶然とした感覚に包みこまれながらも、DNAに組みこまれた本能に従って舌を突き出し、潤んだ淫裂をそっと舐めあげた。ピリリと舌尖を刺激する淫蜜の味わいに、総身が震えてしまう。

「うんツ！ ふう、むうん、ぢゅばつ、クチュツ、ぢゅちゅつ……」

直樹が秘唇を舐めあげた刹那、祥子の腰が大きくバウンドした。ペニスを啜えこむ朱唇がキュツと締めつけ、亀頭をまさぐっていた舌が、強めのこすりあげを見舞ってくる。それでも亀頭や肉竿に歯が当たらないのは、熟女ならではのことだ。

「ぐはッ！ あう、ああ、お、おばさん、激し、すぎるよ。そんな、思いきりしゃぶられたら僕、ンくう、出ちやい、そうだよ」

ポリウム満点の双臀を悩ましく左右に振りながら、祥子の口唇愛撫はその刺激を強めてきていた。眼窩に点る悦楽の火花がその間隔を短くし、陰囊内でとぐるを巻く

白濁液が、ズンッと根本に向かって突きあがってくる。

(ダメだ、まだ、もう、ちよつと。せつかくおばさんのオマ○コ、舐めることが出来たんだから、もつと、しつかり味わっておかないと……)

脂の乗った太腿に絡めた両手に、いつそうの力を加えながら、直樹は必死に射精感と闘っていた。狂おしげに眉間に皺を刻み、再び濡れた女肉に唇を密着させていく。

「ヂュツ、れる、ペロペロ、ンはっ、ちゅぼっ、ぢゅ、ぢゅちゅうう……」

(はあ、おばさんのオマ○コジュース、ブルーチーズみたいにくセが強くて、舌が痺れちゃうくらいに強烈なのに、決してイヤな味じゃないのは、どうしてなんだろう)

クセの強い熟女の淫蜜に、思考が飛んでしまいそうになりながらも、直樹は生々しい女肉から唇を離すことなく、溢れ出る牝汁を喉の奥に流しこみつづけた。

「ンふっ、ふうん、うんっ、ぢゅぼっ、ぢゅぼっ、クヂュツ、ぢゅぼっ……」

淫唇への刺激を強めた途端、熟女の腰が狂おしげに左右に振られ、直樹の口に積極的に秘唇をこすりつけてきた。さらに、お返しとばかりに、口腔内に咥えこんだペニスへの愛撫が強められる。

「ぶはあ、ああ、ぐッ、お、おばさん、ダメ、それ、激し、すぎ、るううう」

「ぢゅちゅっ、グヂュツ、ヂュパッ、クチュツ、ぢゅぢゅっ……」

直樹はたまらず淫裂から唇を離すと、奥歯を噛み締めた状態で、射精感の近さを告げた。しかし、祥子の愛撫が弱まることはなかった。それどころか、さらに激しく、強張りを扱きあげてきたのだ。

「ああ、おばさん、僕、出るよ。ほんとにもう、ぐッ、ツチャウ、出ちゃうううッ！」
目を剥きそうな強烈な快感が総身を襲った。睾丸が根本まで一気に競りあがり、眼窩には極彩色の火花が瞬く。太腿に絡んでいた両手が、自然と熟したヒップへと移動し、柔らかな尻肉をグニユツと揉みこんでしまう。

直後、ビクンツと腰が盛大に突きあがり、張り詰めていた亀頭が弾けた。

ビユクツ、どびゅつ、ドビユツ、ズビユビユツ、どびゅん……

「ンうっ！ ふんっ、ううう、コクツ、むうん、コクツ、ゴクン……」

「ああ、飲んで、飲んでくれてるんだね。おばさんが、僕の精液、飲んでるううう」
迸り出た大量の白濁液を、祥子が小分けにして嚥下している気配に、直樹の性感はさらなる刺激を受けた。ペニスにはいまだ小刻みな痙攣が襲い、その後さらに十回以上の脈動を繰り返し、ようやくおとなしくなったのであった。

「ぷはあ、ああん、いっぱい、出たのね。気持ちよかった、直くん」

ゴクツと喉を鳴らし、最後のひと滴まで精液を飲み干した祥子が、ゆっくりと上体

を起こしあげ、淫靡に上気した顔で見つめてきた。

「は、はい、と、とつても、気持ち、よかったです。ああ、いまのおばさんの顔、すつごくエッチだよ」

強烈な射精による倦怠感が腰全体を覆っていた直樹は、グッタリとベッドにあお向けになった状態で、熟女の顔を見つめ、ブルリと背筋を震わせた。

「うふっ、だって、硬いオチンチン、お口でしたの、久しぶりだったんですもの。それに、お口にあんな濃厚な精液を出されたら、女だったら誰でもこうなっちゃうわよ。そしてなにより、直くんがおばさんのあそこ、上手にペロペロしてくれたから、とっても感じちゃったの」

「お、おばさん……」

普段の母性的な雰囲気とは違う、大人の女の顔を晒す祥子に、直樹は驚きと興奮のない交ぜとなった表情を浮かべ、かすれた声を発していた。

「あらあら、直くんのオチンチン、まだこんなに大きなまんまで。ふふふっ、ほんとに素敵よ。このまますぐに、体験、しちゃう？ それとも少し休憩する？」

そんな少年の態度にクスツと笑んだ熟女は、直樹の下腹部に視線を送り、魅惑の言葉をお口にしてきた。祥子の言葉通り、強烈は射精体験であったにもかかわらず、ペニ

スは衰えることなく、下腹部に貼りつきそうな急角度でそそり立ったままであった。

「けっ、経験、させて、ゴクッ、く、ください」

「うふっ、分かったわ。じゃあ、これからおばさんが直くんを、大人にしてあげる」

艶然たる微笑みを浮かべ、祥子がいったんダブルベッドの上で立ちあがった。恍惚の表情でそれを見つめる直樹に優しく頷きかけ、熟女はペニスを跨いだ。

「ああ、おばさんのオマ○コ、エッチに濡れたあそこが、またはつきりと見えてる。もうすぐ僕のが、そ、そこに……」

薄褐色の淫唇がパツクリと口を開けている様子に、声が上がってしまふ。

「そうよ。直くんがいっぱい舐めて、濡らしてくれたあそこに、この硬いオチンチンが、入るのよ」

腰の脇に両膝をついた祥子が、右手をおろし、急角度で屹立するペニスを再び握りこんできた。ニュチュツ、先ほどの射精で噴きあがった精液と、熟女の唾液にまぶされた強張りには、軽く握られただけで粘ついた音を立てた。

「んはっ、あう、ああ、お、おばさん……」

「はあん、ほんとに硬いわ。それに、とつても熱い。もう少しの辛抱よ。そうすれば、今度はおばさんの膣中で気持ちよくしてあげるわ」

祥子は挿入しやすいよう、淫茎を垂直に起こしあげてくる。その刺激だけで、射精直後で敏感なペニスには悦楽の震えが起こってしまう。

（ほ、ほんとにもうすぐ、僕のがおばさんの膣中に……。ミホちゃんのママト、初めてのエッチを……。ごめんね、ミホちゃん。でも、僕とミホちゃんのためにはこれがきつと最善なんだよ）

予備校で受験勉強に励んでいる年上の恋人に対する罪悪感は、依然として存在していた。だが、受験生の美穂子に負担をかけずに己の欲望を満たすには、やはりこの方法しかないのだと言いつき聞かせ、目の前でタプタプと揺れている双乳に両手をのばす。

モニユツ。たわわな膨らみに触れた瞬間、指先が沈みこむほどの柔らかさが襲った。「うわっ、おばさんのオツパイ、すつごく柔らかい」

「はぁん、いいのよ、揉んでちょうだい。こっちはちゃんと責任を持って、挿れあげますからね」

眉間に皺を寄せ、肉厚の朱唇から甘い吐息を漏らした祥子が、腰をさらに落とす。グチュツ、龟头と淫唇が触れた瞬間、艶めいた蜜音が起こった。

「んはっ、さ、触ってる。僕の先っぽが、おばさんのあそこキス、してるよう」

龟头から伝わる痺れる愉悅に、切なそうに瞳を細め、艶めく熟女を見つめた。

両手にありあまる熟乳に、いつそう指が沈みこみ、得も言われぬ心地よさも襲いかかってくる。

「はふうん、そうよ。直くんの硬くて熱いオチンチン、はつきりと感じられるわ。すぐよ。すぐに、この逞しいオチンチン、気持ちよくしてあげるわよ」

祥子の腰が悩ましく前後に動く。

チュツ、クチュツ、亀頭が淫裂とこすれ合う淫猥な音が、鼓膜を震わせた。

「ああ、おばさん、僕、これだけで、また、出ちゃいそうだよ」

「あうん、我慢よ、もうちよつとの辛抱、はんツ、ここ、ここよ、いい、挿れるわよ」祥子の励まし声の途中で、ンヂュツ、と粘ついた音を立て、亀頭先端が肉洞の入口に触れた。直後、熟女が一気に腰を落としこんだ。

グヂュツ、くぐもつた音を残し、いきり立つ強張りが淫壺に呑みこまれていく。

「くはう、あう、ああ、しゅ、しゅつごい。チンチンがおばさんのオマ○コに……」

その瞬間、直樹は初めての淫悦に目を剥きそうになった。

いきり立つペニス、温かな膣壁に優しく包みこまれ、甘い締めつけに見舞われていた。ウネウネと蠕動する柔壁は、どこまでも甘く強張りに絡みついできている。

「んくうん、はあ、入ったのよ。直くんの立派なおチンチン、おばさんの膣中に、う

んっ、根本まで、入っているのよ」

「はあ、おばさん、これが、セックス、なんだね。僕、童貞じゃ、なくなっただね」
「ううん、そうよ。直くんはおばさんのあそこで、大人の男になったのよ。おめでとう。ほら、もつと気持ちよくしてあげる」

眉間に艶めかしく皺を寄せた熟女は、濡れた声で囁きかけると、ゆっくりと腰を下に動かしはじめた。グチュツ、クヂュツ、熟れた肉洞でペニスがこすりあげられると、すぐさま粘ついた淫音が起こった。

「んくッ、はあ、すっ、すっごい。それ、気持ちよすぎるよう」

「ああん、おばさんもいいわ。直くんの硬いオチンチンで膣中、スリスリしていると、はうん、どんどん変になってきちゃう」

「なって、なってよ、おばさん。僕と一緒に、いっぱい、気持ちよくなってえ」

祥子が腰をゆったりと上下させると、直樹は鋭い喜悦に全身を貫かれた。ビクンツとペニスは跳ねあがり、熟女の肉洞内で優しく絡みつく膣壁を押しやっていく。

迫り来る射精感を必死にやりすぎしながら、両手を這わせた双乳をタプタプと揺さぶるように揉みたてていった。

「はうん、あつ、ああ、素敵、素敵よ、直くん。オッパイ優しく揉まれると、うんっ、



それだけで、あそこがキュンキュンしちゃうの」

「分かるよ、おばさん。おばさんのオマ○コが、僕の締めつけてくる感覚が、オッパイ悪戯すると、強くなるのが、はつきりと分かる。おとお、おばさん……」

ムニユツ、モニユツと熟乳に指を沈めこむたびに、祥子の淫壺が反応し、ペニスに絡みつく柔褻がその締めつけを強めてきていた。強張りにははつきりと締めつけの変化を実感できるが、一気に追いこまれるほどの強烈さはない。優しく女を教えこむよくな、そんな柔らかさもあつた。それでも直樹の性感は、確実に高まっていた。

(このままじゃ、我慢できなくなつて、出ちゃう。せつかく、おばさんが体験させてくれているのに、おばさんにも、もつと感じて欲しいのに……)

高校一年の少年ながらも、直樹の中には男の見栄のようなものが、湧きあがっていた。このまま、祥子の優しい律動に身を任せるのを、よしとしなかったのだ。そのため、自然と腰が上下に動き、熟女の肉洞に積極的にペニスをこすりつけはじめた。

「あんツ、な、直、くうん……。はあ、いいわ。あなたのオチンチン、ほんとに遅しくて、あんツ、このままじゃ、おばさんがあなたに夢中になっちゃいそうよ」

「おばさん、ああ、おばさん……」

グチュツ、ずちやつ、クヂユツ……。祥子の律動に直樹の突きあげが加わり、卑猥

な摩擦音が大きくなった。その音に比例するように、射精感が急上昇してくる。

（くはぁ、自分からも動いたら、気持ちよさが、倍、イヤ、二倍になっちゃってる。でも、やめられないぞ。少しでもおばさんに気持ちよくなって、もらわないと）

奥歯を強く噛み締め、眉間にそれまで以上の深い皺を刻みこみつ、直樹は腰の突きあげを継続していった。

「はんツ、はぁ、あうん、あぁ、直、くんツ。す、凄いわ。あなたのオチンチン、おばさんの膣中で、また、大きく、あんツ、逞しく成長してるの」

「おばさん、くううう、お、おば、きんツ」

「いいのよ、好きナだけ、ズンズンしてくれて、いいの。おばさんのあそこ、直くんの好きなように、してみてえ」

淫靡に潤んだ瞳で見下ろしてきた祥子は、そう言う腰の上下動をいったん弱めた。次いで、双乳を揉む直樹の両手に自らの両手を重ね合わせてくる。

「んくツ、お、おば、さん？」

「直くんの自由に腰を使って、おばさんを感じさせてちょうだい。おばさん、こうやって、オッパイを触ってる直くんの手を支えにするから。ほら、動いて」

突然のことに、腰の突きあげを中断し、かすれた声で問いかけた直樹に、祥子は艶

めいた声で返してきた。さらに、手の平にありあまる熟乳を、円を描くようにやんわりと揉みこませつつ、腰をくねらせてくる。

クイツ、クイツと熟女が腰を動かすと、それだけで肉洞内のペニスは膣壁からの刺激を受け、快感が背筋を駆けあがった。

「はうッ、ああ、お、おばさん……。くうう、おとおお……」

脳を痺れさせる鋭い愉悦に抗うように、直樹は再び腰を突きあげていった。

「はんッ、あう、あつ、ああん、いいん、上手よ、直くん。もつと、もつと力強く、オチンチン、突きこんできてええええ」

（あん、ほんとに感じちやう。直くんの、美穂子の恋人になった男の子のオチンチンで、私、本当に……）

悦楽に顔を歪めた少年が、腰を繰り出してくると、刺激から遠ざかっていた熟褌がこすりあげられ、祥子の脳天に鮮やかな淫花を咲かせてきていた。娘の恋人と結ぶ背徳のセックス。その感覚が、熟女の性感をさらに煽ってくる。

「はあ、おばさん、す、凄いよ。おばさんのオマ○コにこすりつけていると、僕、ほんとにすぐに、また出ちやいそだよ」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>